

2014 年度夏期コース報告

秋 澤 委太郎

1 はじめに

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは、40 週間の年間コースとは独立して夏期コースが設置されている。本年度は 2014 年 6 月 19 日（木）より 8 月 6 日（水）まで実施した。

2 夏期コースの目的と特徴

夏期コースも年間コースと同じく、研究者や法曹界、ビジネス界を目指す学生を対象として、日本社会に違和感なく受け入れられる高度な日本語を教育する、という目標を掲げている。学生は大学レベルの機関で既に 2 年から 3 年程度の学習を済ませていることが入学の条件であり、本コースが提供しているのはいわゆる中上級以上の日本語教育である。これも年間コースと同様である。

近年は、前途有望であり上級日本語の集中的教育を受けることを熱望しながら、様々な事情で年間コースへの入学が困難、あるいは入学を希望しているが決定には至らない、という学生が多い。そこで、そのような年間コース潜在的受講志願者に対して幅広く門戸を開き、日本研究センターの教育を経験できる機会を提供していきたいという観点から、夏期コースは年間コースの簡約版とも言うべき内容になっている¹⁾。

一方で、本コースを年間コースから大きく区別する特徴は、教員構成である。夏期コースでは、年間コースを担当する常勤・非常勤講師に加え、普段は海外、主に米国で教鞭をとる講師を広く招いている。本年度は、イェール大学、スワスモア大学、デューク大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の教員が参加した。夏期コースは、多様な背景を持つ日本語教員の経験や意識、方法論を共有する場としても機能している。

3 学生の構成とクラス編成

今年度の受講者は過去最多の 48 名であった。その内訳は、大学院生（今年度秋学期より入学見込の学生含む）が 41 名、大学学部生が 4 名、大学卒業後進路未定の学生が 2 名、社会人が 1 名である。受講者はコース初日の試験で習熟度や得手不得手の傾向を判定され、これに応じて 6 つのクラスに分けられる。各クラスは学生 8 名で、1 名の担任と、1 名の授業担当講師が運営した。

夏期コースは年間コースと独立して学生を募集しているが、今年度参加者のうち3名は「サマー・リクワイアド」、つまり年間コースへの参加準備のために夏期コース受講を義務付けられた学生であり、3名は「サマー・レコメンデッド」（年間コースへの参加準備として夏期コース受講を推奨された学生）であった。しかし、サマー・リクワイアド、サマー・レコメンデッドのためだけのクラスを設置することはなく、クラス分けは他の通常受講者との区別なしに初日の試験の成績に基づいて行った。

4 教育活動の詳細

本章では、夏期コースの教育活動についてより詳しく述べる。

4-1 授業・校外学習

授業では、全てのクラスにおいて、学生によるスピーチとそれに関するクラス全員での討論、NHK ニュースなどのビデオ素材を用いた聴き取りと内容報告の練習、日本語教科書や新聞、雑誌、書籍からの記事を用いた読解練習とそれを通じた語彙・表現力の増強、そして、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター『待遇表現』（The Japan Times）を用いた敬語の訓練が行われる。作文の宿題も定期的に課される。また、日本文化と社会を体験できる機会（校外学習）も5回設けられている。コースの最後には、学んだ日本語を生かし、学生が自分の専門分野等について発表と質疑応答を行う口頭発表会が開催される。本コースは成績や単位を発行していないが、クラスごとに行う中間試験と最終試験によって学生の達成度を判定しており、この結果は学生自身の後学のために活用されている。

毎日の時間割は、50分授業が4コマという構成である。うち3コマを午前9時40分から午後0時30分までの間に行い、1時間の昼休みを挟んで午後1時30分から4コマ目を行う。校外学習のある日は、午後の授業時間がこれに充てられる。高度に知的な内容を読み、書き、話しそして聞くことができるようにする、そして公の場で社会人として通用する言葉遣いを身につけるという大きな目標は全クラス共通であるが、4コマの授業時間（校外学習を除く）の中で何をどのような順番で行い、教材として何を用いるかは、主任と協議の上で各クラス担任が主体的に決定している。教育内容はコース開始前に計画されるが、クラスに割り当てられた学生のレベルや学習ストラテジー、あるいは関心の対象が事前の想定と合わないことも多く、そうした場合には予定された読み物をコース期間中に変更するなどの調整が行われる。

また、学生1人あたり全コースを通じて1時間、通常授業の時間枠の中で教員との個人授業の時間を設けている。個人授業は、クラス担任が学生と1対1で接し、学生の個別のニーズに合わせた活動を行う目的で設置したものである。

学生1人あたり1時間というのは、教員から見れば授業8時間分ということである（1

クラスは学生8名)。ある学生が教員の指導を受けている時間、他の学生は自習をする。この学生にとっての1時間、教員にとっての8時間をコースの中でどう配分し、その時間で何をするかは各クラスの担任が柔軟に決定している。例えばあるクラスでは1人15分ずつの面談を4回行った。指導内容は、苦手な文法項目の練習、中間試験の復習、期末発表会の準備、というものであった。一方、他のクラスでは1人10分ずつの面談を1回、そして25分ずつの面談を2回行い、コース開始時の学生の希望の聴き取り、学生各自の専門分野の日本語資料に関する質問受付、そして期末発表の準備の時間として活用した。

通常授業の他、横浜国立大学、神奈川大学、フェリス女学院大学より大学生インターンの協力を得て、放課後に自由会話の時間を設けた。学生は2週間に1度、3～5人が1組となり、授業の際のような緊張感のない自由な会話を自分と近い世代の大学生と楽しむことができた(1回の時間枠は1グループあたり30分)。

校外学習の詳細等、上記以外の日程については、末尾の資料を参照されたい。

4-2 授業の実例

本コースは2～3年以上の日本語学習経験を学生の応募条件としていると先に述べたが、実際に集まってくる学生の能力は多様であり、前節4-1で述べた全クラス共通の活動であっても、読解教材のレベルや量など、学生に対する要求はクラスごとに異なる。また、文法の扱い方もクラスにより差がある。本節では、筆者が講師として参加した「夏草」クラスの授業の実例を参考までに挙げる。このクラスは本夏期コースで上から2番目のレベルである。初級～中級までの学習内容が概ね身につく、読解と作文の能力は高いが、社会的コンテキストに応じた会話能力(敬語、文語、口語の使い分け)は未熟であり、大学院生レベルの高度な議論を交わすには語彙力の低い学生が集まった。基本的な文法ミスを減らすこと、語彙力と表現力を増強すること、学会発表やパネルで用いられるような丁寧でかたい発話スタイルと、日常会話で用いられるような砕けた発話スタイルを適切に使い分けられるようにすること、そして、意見陳述、反論、依頼など、相手との社会的関係に応じて繊細な配慮が求められる言語行動を失礼なく遂行できるようになることをクラスの実例とした。意欲が高く協力的な学生が集まり、例えば結婚制度の是非や集団的自衛権問題といった話題に関する討論で鋭い意見の対立が顕在化しても、話し合いは不穏当な言動を一切排してあくまで友好的に保たれた。

1 時間目 (9:40～10:30)

- ・ ミニ発表+討論：1日1人の学生が2分程度のスピーチを準備し、発表後、質疑応答。
- ・ ニュース報告：前日にNHKニュース7を視聴し、学生が興味を持ったニュースを報告して意見を述べる。報告の担当者はあらかじめ決めず、座談会的な形式で語り合う。
- ・ 言葉の使い方テスト：前日の読解授業(2時間目参照)等で扱った単語や表現、文型の

読み方、意味、使い方を、例文の作成を通して確認する。

2 時間目 (10:40～11:50) 2

- ・ 読解演習：課題の読み物の意味を確認しつつ、そこに含まれている重要表現・文型を使って例文を作る練習をする。また、読み物の内容についての意見交換も時間の許す限り行う。読解練習で扱った記事は以下の通りである。
- ・ 東京大学 AIKOM 日本語プログラム 近藤安月子・丸山千歌『上級日本語教科書 文化へのまなざし』（東京大学出版会）から一部抜粋
- ・ 国家安全保障会議決定 閣議決定「国の存立を全うし、国民を守るための切れ目のない安全保障法制の整備について」から一部抜粋
- ・ 高橋浩伸、大井尚行「日本人の美意識に関する基礎的研究」芸術工学会『芸術工学会誌』35
- ・ 東浩紀「人文系が語るネット」(it.nikkei.co.jp)
- ・ 福島県『週刊ビッグコミックスピリッツ』4月28日及び5月12日発売号における『美味しんぼ』について

3 時間目 (12:00～12:30)

- ・ 待遇表現：前述の『待遇表現』テキストを用いた待遇表現の練習と、梁晶子・大木理恵・小松由佳『日本語 Eメールの書き方 Writing E-mails in Japanese』（The Japan Times）を用いた電子メールの書き方の練習。

4 時間目 (13:30～14:20)

- ・ 月曜～水曜：1日1人が順番に担当する討議責任者の決めた話題について、クラスで討論を行う。責任者は討論のための資料を準備して自分の見解を発表し（5～10分程度のスピーチ）、討論を主導する。
- ・ 木曜：その週に学んだ語彙・表現・漢字の使い方を復習する。
- ・ 金曜：校外学習。ただし、最後の金曜日は通常授業（試験と口頭発表会のための準備）。

4-3 他5クラスの概略

本節では、最高レベルの夏海クラス以下、レベル順に各クラスの概略を述べる。

「夏海」

日常的な会話の交換や一般的な社会問題についての意見陳述は既に十分可能であり、専門書を読めるレベルの読解力も身につけている学生が集まった。自分の専門の分野（あるいはそれ以外も）に関して具体的・抽象的な議論を自在に行えるレベルの日本語力を身に

つけることが彼らの目的となる。

ミニスピーチとニュース報告を頻繁に課した上、さらに学生自身の専門をテーマとした長めの発表も数度行わせた。読解学習では市販の日本語教科書を一切使わず、社会学や人類学、民俗学、文学の専門書、さらには歌舞伎の解説パンフレットや短編小説など、幅広いテーマ、ジャンルの記事を扱った。1日に授業でカバーした分量は10ページから30ページと非常に多い。他にも、学生の求めに応じてビジネス日本語会話のロールプレイを行ったり上級学習者が悩みがちな文法事項(連用中止形の用い方など)を練習したりと、日々変化に富んだ柔軟な授業展開を行った。

「夏柳」

本クラスはレベル的には夏草クラスに次ぐとはいえ、クラス分け試験において初級文法の定着度と読解力が若干見劣りする程度であり、夏草の学生に比べて顕著な能力差が見られたわけではなかった。

夏海、夏草の両クラスでは文法だけを扱う時間は設けなかった³⁾のに対し、夏柳クラスとそれ以下のレベルでは文法の授業を設けた。夏柳クラスでは読解教材に含まれる重要文型の例文作りを宿題として課し、授業でそれに対するフィードバックを行った。

読解教材としては前述の『文化へのまなざし』を扱ったほか、学生各自がクラスで読む資料を探して選び、選んだ学生がそれを教材として授業を主導する「学生先生」活動を行った。「先生」を担当する学生は、教材を理解するために必要な背景知識の事前説明を授業の前日に行い、授業では他の学生が教材をきちんと読めているかどうか確認し、理解が不正確であればそれを訂正した。そして、内容に関するクラス討論を主導した。

今年の夏柳クラスは参加学生の専門領域が全て異なっていた。担当教員によれば、学生は「学生先生」活動に限らず授業の中で一貫してそれぞれの専門的立場から発言を行ったが、クラスメートの話す内容が自分の専門と関係ないからといって関心を失ったり幻滅したりすることはなく、積極的に議論に参加し語彙や知識の幅を広げたとのことである。

「夏山」

初級・中級文法の定着に疑問があり、日常的なやりとりはできても込み入った意見をまとめて述べることはまだまだ難しい、という傾向の学生が集まった。授業では、読解教材や自分の研究の内容を分かりやすく丁寧に、そして文法的に正確に話せるようになることを目指した。

初級文法の解説と練習問題を簡略にまとめた夏期コース独自の冊子、そして中間試験以降は年間コースで用いている『接続表現』(IUC独自教材)も一部活用し、毎日初級～中級文法の復習を行った。

読解教材はアカデミックジャパニーズ研究会編著『大学・大学院留学生の日本語③論文

読解編』(アルク)や『文化へのまなざし』等の市販教科書をはじめ、雑誌や書籍から抜粋した生教材も用いた。

期末発表会に向けたコース終盤には、読解のクラスで論文の序論部分を読ませ、合わせて文法クラスで接続詞の使い方を指導し、そこで学んだことを用いて期末発表会の序論を執筆させた。また、個人レッスンの時間も全て期末発表のための資料読解と原稿作成の指導に費やし、初級文法の復習から始まって7週間で自分の専門分野に関するアカデミックな議論の構築に至るといふ計画的な、そしてハードルの高いカリキュラムを締めくくった。

例年、夏山クラスでは読解力が弱い学生が集まる傾向が強いのだが、本年の学生は期末発表のため、教員の個人指導のもと、各自数十ページに及ぶ専門的論文を自ら選び出し、苦勞しつつも読んだ。担当教員は、学生の向上心と努力に圧倒されたと述べている。

「夏鳥」

夏鳥クラスの学生の能力は総じて初級修了から中級初期程度といえる。基礎を固め直し、その上に高度な日本語運用能力を積み上げていくことが本クラスの目的であるといえるだろう。

文法のテキストとしては、夏期コース独自の初級文法教科書と、本クラス独自の文法・表現パッケージを用いた。読解の授業では、岡まゆみ・筒井通雄・近藤純子・江森祥子・花井善朗・石川智『コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら』(くろしお出版)、『留学生の日本語③』のほか、新聞記事や小説などの生教材も用いた。

例年、このクラスには既習の学習内容を忘れてしまっている、あるいは頭では理解していても会話や作文で正しく使えない、という学生が集まる傾向がある。どれほど指導してもなかなか間違いが直らず、教員は悲しい思いをすることも少なくない。しかし今年の学生は基本的文法事項が概してよく身につけていたので、既習項目の復習が順調に進み、それ以上の課題(抽象度の高い文章の理解や産出)に費やす時間を多く取ることができた。学生は担当教員の指導によく応え、新たに学んだことを自分の発話や作文の中で積極的に活用した。

「夏空」

本クラスでは、学生の会話力の弱さと初級文法の定着不足が顕著であり、ともかくも基本文法を用いた単文が正確に産出できるようにすることを最大の目標とせざるを得なかった。

文法の授業のためには友松悦子『初級日本語文法総まとめポイント 20』(スリーエーネットワーク)、読解の授業のためには先述の『留学生の日本語③』『上級へのとびら』を主に用いた。また、『留学生の日本語③』は作文の指導にも活用した。

学習歴が短く日本語にまだ慣れていない、化石化した誤りがなかなか直らない、など、

学生たちはそれぞれに異なった問題を抱えており、担当教員は指導に苦勞したが、基礎固めというクラスの目標を学生は真摯に受けとめ、最後まで意欲的に学び続けた。

5 受講者によるコース評価

今年度受講者のアンケートからは、彼らの高い満足度が伺える。34名の回答者のうち、コースの4段階評価を Excellent とした者は16名、Good とした者は18名、Fair、あるいは Poor とした者はゼロであった。また、33名⁴が本コースを他の学生に推薦する意志を表明している。

具体的なクラス活動や教員の指導方法について改善の余地を指摘する声はいくつか見られた（例：「紙に書かせる日々の単語テストを設けて欲しい」「先生にもっと学生の間違いを指摘して欲しい」）ものの、全ての学生が自分の経験について総体として高い満足感を表明した。その理由として主に挙げられていたのはコースのインテンシブさと教員の献身である。

校外学習に対する満足度も総じて高い。今年も座禅研修（於鎌倉圓覚寺）と歌舞伎鑑賞教室（於国立劇場）は人気だった。

6 おわりに

筆者は、「7週間、とても勉強になった。しかし、もっと勉強が必要だと分かった。次はぜひ年間コースに参加したい」という感想を学生が持つことが夏期コースの最大の成功だと考えている。本年もそのような声を学生から直接に、あるいはアンケートを通じて複数聞くことができ、嬉しく思っている。

一方で、年間コースを受講することがどうしても不可能、という事情のある学生も少なくない。夏しか日本語を集中的に学ぶ時間がないという中上級の学習者に対し、短期集中コースとしてできることは何なのか。本コースの教育内容は、この課題に 대응するためにさらに磨きをかけていく必要がある。

また、個人的な感触に過ぎないが、本年受講者のコース評価がきわめて好意的だったことは、学生の質の高さの反映でもあるように思う。今年も、第4章の各クラス概略で示した通り、全てのクラスで学生が意欲的で優秀であり、教え甲斐があった。それに加え、クラスメート同士の仲が非常に良かった。このような良好な雰囲気を活かし、骨身を惜しまず学生の意欲に応えた関係教職員、ならびに放課後の自由会話に協力してくれたインターン生には、この場を借りて深く御礼を申し上げる。今後も、優れた学生のニーズを満たす密度の濃い教育と、それを支援する校外学習等の諸活動の充実を追求していく所存である。

（あきざわ ともたろう／2010～2014年度夏期コース主任）

注

- 1 ただし、年間コースで必須科目であるS K I P (Special Kanji Intensive Program) は、夏期コースでは学生の自由選択制としている。
- 2 「夏海」クラスでは、読解演習により多くの時間を割くため、2時間目の授業時間を延長し、逆に3時間目(待遇表現)を短縮した。
- 3 ただし、読解の授業において、教材に含まれる重要文型の運用練習を行ったので、コースを通じて授業で文法を全く扱わなかったわけではない。
- 4 ただし、うち2名は条件付き：「学生のレベルと関心による」「もし学生に力を注ぐ意欲があるなら」

資料：2014年度夏期コース 校外学習等

6月

- 19 (木) 所長より挨拶、クラス分け試験(筆記、聴解、発話) (9:40~12:00)
- 20 (金) オリエンテーションと緊急時避難訓練 (9:40~12:30)、歓迎会 (12:30~14:30)
- 27 (金) 校外学習① 臨済宗・圓覚寺派総本山 圓覚寺 座禅研修、明月荘見学(オプション)

7月

- 4 (金) 校外学習② 歌舞伎鑑賞教室「傾城反魂香」
- 11 (金) 中間試験 (9:40~12:30)、校外学習③ 横浜の日① 4班に分かれ横浜市内を見学
A.日本新聞博物館・放送ライブラリー、B.日本郵船歴史博物館、C.神奈川近代文学館
- 18 (金) 校外学習④ 横浜の日② 4班に分かれ横浜市内を見学
A.開港資料館、B.横浜地方裁判所、C.麒麟横浜ビアビレッジ、D.原鉄道模型博物館
- 25 (金) 校外学習⑤ 「東京の日」 4班に分かれ東京を見学
A.国会議事堂(参議院)、B.東京都写真美術館、C.明治神宮、D.アクティブ・ミュージアム

8月

- 4 (月) 最終試験 (9:40~12:30) 午後は発表会準備
- 5 (火) 口頭発表会 (9:40~14:20)
1人あたり質疑応答を含め15分、関心・専門別に4箇所に分かれ同時開催
- 6 (水) クラス担任との個人面談 (9:40~12:30)、修了式と祝賀会 (12:30~14:30)